

生徒の学び・学生の学び — 中大連携の試み

河上 婦志子
鈴木 浩

はじめに

(1) 「パイオニアスクールよこはま」への応募

横浜市立松本中学校と神奈川大学は歩いて15分ほどの至近距離にあるため、これまでも体育館や運動場の相互利用や、行事の際のプラスバンドの演奏などさまざまな形で関係を持ってきた。神奈川大学教職課程と松本中学校との関係が深まったのは2003年学生が、中国帰国者の家族である生徒の言語生活の支援や部活指導の援助など、生徒の学びを支える活動にボランティアとして参加する一方で、学生が新しい授業方法を学ぶために松本中学校の授業参観をさせてもらうようになってからである。横浜市教育委員会「パイオニアスクールよこはま」の募集に際して、こうした関係を基礎に「中学校・大学連携事業の試み」をテーマに掲げて応募したところ、2005年度から「提案公募型改革モデル校」として採用されることになった。

中・大連携事業として立ち上げることによって、これまで行なってきた協力関係がより深まり、バラバラに行われてきたさまざまな交流を一定の計画の下に実行できる。神奈川大学は、地域社会への貢献を果たしつつ、教職課程を履修している学生に中学校との交流やボランティア経験の機会を提供でき、松本中学校は、学内行事、PTA活動、生徒指導などに関して、さまざまな支援を大学から得ることができるのだ。

1年目の2005年度の事業としては、学生ボランティアによる中学校の授業サポート、夏期休

業中の補習サポート、「総合的な学習の時間」の支援、学生ボランティアの部活指導、その他大学の施設開放やPTA対象の講演会などが計画された。

(2) 「総合的な学習の時間」の支援

中・大連携の場合、高校と大学の連携とは異なり、受験生を媒介にしないだけにより純粋に連携が組めるのであるが、ともすれば大学側が一方的に中学校にサービスを提供する形になりかねない。もちろん地域社会への貢献が求められる高等教育機関としては、近隣の中学校での教育に何らかの支援を送ることはやぶさかではないし、その機会を大いに利用したいところである。だが大学からの一方的な出超が続いては相互関係が破綻をきたす恐れもある。それを防ぐためには、学生たちのボランティア体験を実りあるものにすることが必要である。

本稿は2005年度の事業の1つである「総合的な学習の時間」の支援について、その経過と結果を報告するものである。学生ボランティアによる支援を行なう際に念頭にあったのは、「総合的な学習の時間」を生徒の自発的な「学び」の場にすると共に、学生にも彼ら自身の「学び」を保障することであった。もちろんボランティア体験そのものが、学生に大いなる学びの機会を提供してくれる。しかしそこに何らかの意図的な態勢がなければ、単なる一つの経験で終わってしまうかもしれない。

そこで「生徒の学びと学生の学び」をともに

達成するプランとして考えついたのが、松本中学校3年生たちの総合学習のテーマである「地域に還す」を、PTAや地域住民を対象にした「中学生による神奈川大学キャンパスツアー」で実現することであった。

1. キャンパスツアーの背景と計画

松本中学校では、全国に先駆けて「職業体験学習」を実施してきた。地域にあるさまざまな事業所を訪問し、実際に職業体験をして自らの進路選択に役立てるというキャリア教育の一環としての位置づけであった。

2002年からの現行学習指導要領により「総合的な学習の時間」が導入されたのを機に、従来の「職業体験学習」を拡大再構成して「地域学習」として実施することになった。具体的には、1年生で「地域を知る」というテーマで地域の商店や歴史、防災対策などについて調べ、2年生では「地域に学ぶ」として地域の事業所での職業体験などを行なうこととした。そして、3年生では「地域に還す」ということで、中学生が地域に貢献できることを企画したり発言したりすることとした。

「総合的な学習の時間」をさらに発展させるためのプランを練る中で、学習対象の1つとして地域の教育機関である神奈川大学を組み込む案が出た。従来の方法にしたがってこの案を実行に移すとすると、中学生が大学を訪問して調査し、その成果をまとめて報告するという「調べ学習」のボタンを取ることになる。しかしそれでは3年生の「地域に還す」というテーマを実行できないばかりか、客体化された神奈川大学という位置づけになってしまい、相互に主体的であるはずの「連携」の意味がない。そこで「生徒の自主的な学習」を支援するという「学生たちの主体的な活動」を組織することによって、両者の学びを達成する場を作り上げようとしたのである。生徒は大学について学び、学生は生徒支援を学ぶ。だがこれだけでは物足りない。新しいことへの挑戦という意味での

「パイオニア」にふさわしい企画が欲しい。

そこで浮上してきた案が「キャンパスツアー」である。それは、学生の支援を受けた中学生が、保護者や地域住民を対象にキャンパスツアーを実行するというプロジェクトである。もちろん学生が生徒に神奈川大学キャンパスツアーを提供し、そこで生徒たちが学んだことを後日発表するという形の企画もありえたが、中学生自身の主体的活動を重視し、彼ら自身が企画立案したツアーを、中学生自身にガイドしてもらうことにしたのである。また中学生の手で地域住民をキャンパスツアーに案内してこそ、3年生の「総合的な学習」の目標でもある「地域に還す」を実行することにもなる。

一方、大学生が中学生のキャンパスツアーの企画と実施を支援するに当たって、大学生自身にもさらなる「学び」の機会を提供することにした。それは、キャンパスツアーで回る大学内の組織や施設・機関の協力要請をできるだけ学生が行なうようにするというものである。各組織や施設の関係者に、このプロジェクトの趣旨を説明し、中学生による調査を受け入れて最終的にはキャンパスツアーの訪問先となることを応諾してもらうという交渉作業を、学生自身の手で行なうのだ。

こうしてキャンパスツアーのプロジェクトは3段階の構成をとることになった。第1段階は学生による訪問先の選定と交渉。第2段階は、学生が選んだ訪問先の中から中学生自身による訪問先の決定と調査。第3段階は、ツアーガイドとしての中学生による保護者や地域住民対象のキャンパス案内。

表1はプロジェクトの時間的経過をまとめたものである。これにしたがって、生徒と学生の活動を記述してみよう。¹⁾

表1 活動の経過

4月27日	ボランティアの学生の顔合わせ：キャンパスツアーの計画と3段階システムを取るこの説明。学生には生徒の自主的活動を支援する立場を堅持して欲しいと要望する。
5月12日	中学側の要望を受けて男女1名ずつの5チームを編成。チームそれぞれのテーマも決定。資料を参考に、キャンパスツアーの候補（施設や組織）を選び、その中から10ヶ所程度に絞る。
5月26日	中学校側でも各テーマに関心をもつ生徒でグループを編成し、それぞれのグループが大学に来られる日程を大学に連絡。
5月31日	中学生からグループ毎に学生への質問を提出。
5月下旬～ 6月中旬	学生が候補の組織や施設を回り、キャンパスツアーへの協力交渉を実施。 学生が中学校に出向いて生徒と顔合わせ。自己紹介や組織・施設の説明。
6月中旬	生徒を引率して大学内の下見ツアー実施。8～12ヶ所を回る。この時は単に外側から眺めるだけで職員や関係者への質問はなし。学生はこの日のために訪問先リストやマップを準備。下見の後、中学生がそれぞれの訪問先に質問したい事項を書き込む用紙も作成。
6月下旬	中学校で学生と生徒が、キャンパスツアーをする組織や施設を5ヶ所に絞る。質問事項を考える。
7月上旬	中学校の総合的学習の時間「地域学習」の期間に合わせて、学生に引率された生徒が選択した5つの組織・施設を訪問。関係者にさまざまな質問。内部をより詳しく観察。
9月下旬～ 10月上旬	中学生との打ち合わせやキャンパスツアーのリハーサル。 数回の打ち合わせや2回のリハーサルを行なったチームもある。
10月5日	各チームのキャンパスツアーのスケジュール完成。関係各所に文書で再依頼。
10月8日	キャンパスツアー。本館玄関前で集合。チーム毎に参加者を引き連れて、訪問先を巡る。 終了後、控え室に集合して感想文を書く。

2. 第1段階：キャンパスツアーの下準備

(1) 学生の活動

2005年4月27日、誘いに応じて集合した学生たちに、このプロジェクトについて説明し、大学の組織資料や地図を渡して、キャンパスツアーのコースプランを作ってくれるように依頼。複雑な3段階構成であること、ツアーの主役はあくまで生徒たちであり、学生の役割はその支援であって指導ではないことなども話す。学生たちは1人を除いてすべて教職課程を履修している3年生であった。

5月12日、再集合した10名の学生たちは、それぞれのプランや関心にもとづいて男女1名ずつの5チーム、①文化・芸術、②科学・理科、③スポーツ・健康、④施設、⑤総合を編成。組織資料や大学案内などをもとにキャンパスツアーの候補先を10か所以上選び、それぞれを学生

が訪問してプロジェクトの趣旨を説明し、中学生の下見見学やキャンパスツアーの対象になるかもしれないことについての協力を取り付ける交渉をすることになった。最終的にキャンパスツアーの対象となるのは5か所としたので、学生が開拓する組織や施設が必ずキャンパスツアーに含まれるというわけではなかった。そのため訪問先への説明がさらに複雑になり、学生たちは交渉に苦労することになったのである。最初から5か所にしなかったのは、生徒の選択の余地を残したかったからである。何かを捨て、何かを選ぶという意味決定を中学生にも経験してもらいたかったのだ。

野に放たれた猟犬のように学生たちは飛び出していき、キャンパスを駆け巡ることになった。これがかなり無謀な試みであることはわかっていた。学生に営業用語でいう「飛び込み」してもらったからである。予め私（河上）がそれ

それぞれの組織の主要関係者に連絡をとり、担当部署を紹介してもらって趣旨を説明した上で学生を派遣することもできた。その方がずっと容易に事が進んだに違いない。だが敢えてそれをしなかった。彼らに交渉の手続きやテクニックを体験して欲しかったからである。大学の意思決定上の組織に文書を回してあるとはいえ、おそらく何の予備知識もない相手に、プロジェクトの目的や意義を説明し、今後の協力の内容を理解してもらい、応諾を得るといのは、学生ならずとも非常に困難な作業である。しかし文化系の学生である彼らにとって、社会に出てからの仕事の大半は人間相手の交渉で占められるに違いない。大学時代にこの苦勞を体験しておくことができれば、それは実り多い学びの機会を享受したことになるはずである。

もちろん交渉先が大学外の組織や施設であれば、このような暴挙は避けた。学内の組織・施設であるからこそ、そして対応してくれるのが大学の職員や関係者であるからこそ、学生の学びや育ちに手を貸してもらえるものと信じて彼らを送り出したのだ。とはいえ交渉が難しいと予想される訪問先については、予め連絡を取り了解を得るなどした。

学生たちは、自分たちが選んだ組織・施設で担当職員を捜し当て、彼らにアクセスしてプロジェクトの趣旨を説明し、中学生の見学、そしてその後続く保護者たちへのキャンパスツアー実施の許可を得なければならなかった。予想通りこの過程で学生たちは大いなる苦勞を味わい、時には辛くて不愉快な思いもした様子だ。またそれ以上に、突然の訪問に職員たちは戸惑い、業務の邪魔にもなったようだ。とりわけ複数のグループが訪問先に選んだ組織では、同じような意図をもった学生たちが、次々と押しかけてくるので困惑の度合いも深かったと思う。しかし学生の成長と学習につながるのなら理解し協力してもらえればと信じて、問い合わせや苦情の連絡が来るまで静観することにした。そして苦情を呈されれば確実にこちらに否

があるので平身低頭謝って、協力を要請することに努めたのである。

学生たちは下調べに出かけた先で、文書による申請を要求されることや上層部の了解が得られるまで待たされることもあった。また組織内での連絡漏れで何度も足を運ばされることもあったようだ。しかし彼らは辛抱強く試練に耐えて、訪問先を確保していった。その過程で私(河上)は依頼文書の書き方を説明したり、学生が紹介を頼んできた施設の関係者に連絡を取ったりして側面から支援したが、どのような訪問先を選ぶか、またどのように動くかはなるべく学生の自主性に任せることにした。

この間の経験を、学生たちは次のように書いている。²⁾

施設に挨拶に行くにも、ものすごく緊張したし、また挨拶する際に持参すべき資料作りにも悪戦苦闘しました。・・・それでも施設へのお話も何度も伺うようになってくると、なんとなく始めたばかりの頃の不安や緊張などの「イヤな要素」が自分の中から消えていったような気がしました。

様々な場所でキャンパスツアーの依頼をしていく中で、内容を正しく相手に伝えることの難しさを知った。相手は何も知らないからといってだらだらとキャンパスツアーのことを話しても相手に迷惑なので、簡潔にかつ重要な部分を逃さずに伝えることが大事だと学んだ。

この他にも「施設に許可を得るなどの『外回り』的なやり方のコツみたいなのも、身についたと思います」と感想を書いた学生もいれば、連絡のためのメール交換の間に、文章が説明的になり、丁寧な言葉遣いができるようになるなど目ざましく変化していった学生もいた。この時期の反省点として、「早めに日程を決めてから交渉に移っていれば、曖昧な日程で相手側に

ご迷惑をかけずに済んだ」と感じた学生もいれば、「責任者や窓口をはっきりさせ、文書を送付した上で交渉にかかるべきであった」と書いた学生もいた。学生たちは苦労と工夫を重ねる中で、社会人としての初歩を学び始めたようであった。

こうして問題点を掌握した学生たちからの要望や関係部署からの要請もあって、6月中旬、キャンパスツアー・プロジェクトの目標や目的を記した協力依頼文書を作成。学生たちは必要に応じてこの文書を持参して活用することにした。

この第1段階で、最も困難を感じたのは学生との連絡である。その理由の1つは、新学期が始まってからプロジェクトを立ち上げたために、学生たちの空き時間が全く不一致で、全員集合どころか、各チーム2人一緒に集まってもらうことも難しいことが多々あったことである。できるだけ昼休みの時間に相談に来てもらうこと、必要な文書は一定の場所を介して頻繁にやり取りすることにしたが、連絡はもっぱらメールに頼るしかなかった。第2の理由は、学生たちが「報告・連絡・相談」の大切さを十分認識できていないことにあった。もちろんその重要性を理解することも、このプロジェクトの目標の一つであったのだから無理からぬことだが、チームによっては2人の学生が2人とも何の連絡もしない場合があって、彼らの活動の掌握に苦労することがあった。

第1段階の反省点としては、学生の活発な行動についていけないところもあって、学生の活動を側面から支援してくれていた関係者、とりわけさまざまな苦情を受け付けてくれていた部署への連絡が遅れたことである。私（河上）にとっても初めての経験であったとはいえ、もう少し早めに学生の活動を掌握でき、事前に連絡できていれば不要な摩擦を避けることができたかもしれない。

（2）生徒の活動

松本中学校が神奈川大学との連携事業を開始した2005年度より、神奈川大学は「地域学習」の7つの対象のうちの1つになった。1年生では「神大を知る」として、調べ学習とキャンパス巡りを実施することに、2年生では「職業体験」として、学内のさまざまな仕事を体験することに、そして3年生はキャンパスツアーを実施し、保護者や地域に自分たちの学んだことを「還す」ことにした。

3年生に学習対象の希望をとる段階で、「神奈川大学」を選べば中学生自身が「キャンパスツアー」のガイドをすることになると伝えて募集した。当初、非常に多くの生徒が希望したが、適正人数である30人程度に調整した。

中学生の第1段階の学習活動は、①大学を知る、②テーマごとにグループを作る、③神大について調べてみたいことを出し合う、である。最初に「大学とは何か」について調べることは、この学習に欠くことのできない活動である。生徒はインターネットを通じて、さまざまな大学の公式ホームページを探り、キャンパスの広大さや施設の充実ぶりに驚かされていた。また、カリキュラムの多様さや難しそうなお講座名に戸惑いもした。こうしたいわば導入的な学びを通過した後、今度は具体的に「神奈川大学」について調査活動を開始したのである。

5月中旬から6月中旬にかけて学生たちが協力交渉を行なっている間、中学生たちも5つのチームに分かれ、知りたいことや行きたい場所について次のような質問をまとめ上げた。これは大学に送られ、それぞれの学生チームに伝達された。

<生徒からの質問> A=学生へ B=河上へ
【文化・芸術チーム】

- A ・常民研って何ですか？
- ・勉強は何時間しますか？
- ・吹奏楽部の練習時間はどれくらいですか？

- B ・河上先生は、中学の教科でいうと何を研究しているのですか？
 ・ゆとり教育についてどう思いますか？
 ・最近の時事問題で気になることは何ですか？

【科学・理科チーム】

- A ・どれくらい授業に出れば単位を取ることができますか？
 ・工学機器はどれくらいの値段ですか？
 ・受験の時、どれくらい勉強をしましたか？
 B ・どの学部が人気がありますか？
 ・特徴的なサークルは何ですか？
 ・文化祭はありますか？

【スポーツ・健康チーム】

- B ・一番人気の部活・サークルは何ですか？
 ・大学とは、どんなところですか？
 ・大学教授になるにはどうすればいいのですか？

【施設チーム】

- A ・神大の中の人気店は何ですか？
 ・自慢の施設は何ですか？
 ・人気のある部活動は何ですか？
 B ・神大生は先生にとってどんな学生ですか？
 ・神大に勤めて何年ですか？
 ・ジェンダーって何ですか？

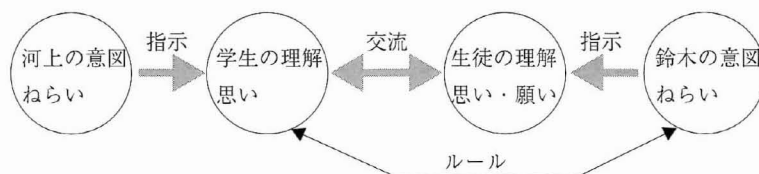
【総合チーム】

- A ・神大に入ってよかったことは？
 ・中学と大きく違うところは何ですか？
 ・中学生に参加できるイベントはありますか？

- B ・どのような研究をしているのですか？
 ・大学教授になってよかったことは何ですか？
 ・今の中学生に一言

中学生にとって大学というものを捉えることは、予想以上に難しかったようだ。朝ホームルームに集まって一日がスタートし、係や委員会活動があり、多くの人が部活動に参加している、という中学校のイメージからなかなか脱却できない。質問を見ると「人気のある部活動は何ですか？」などというものがある。これなど、大学の体育会の部活動が、中学校の部活動と全く違うレベルで行なわれているということがイメージできていない典型である。こうした状態であったが、生徒たちなりの調査を行なって、学生との出会いに向けて学習を重ねていった。そして先の質問リストが出来上がったのだが、その際なるべく生徒の素直な質問をぶつけていこうと考えた。あまりに誤解している場合は修正し体裁を整えたが、教師のアドバイスは最小限にとどめるようにした。

ところで、生徒と学生、そして鈴木と河上の位置関係を図示すると下図のようになる。河上から鈴木の間には距離がある上（もちろんメールでのやりとりは頻繁に行なったが）、その間に学生と生徒が介在しているので、それぞれの意図やねらい、理解や思いの間で当然ズレが生じる。このズレを修正していき、ともかく7月の第1週までにある程度の形を作らなければならなかったのだから、学生はさぞ苦労したであろう。しかし、そのズレを修正する努力のプロセスもこのプロジェクトの狙いのひとつであった。



3. 第2段階：キャンパスツアーの計画立案

(1) 学生の活動

6月中旬、いよいよ学生たちが自分たちの下調べを終えて生徒たちと対面することになった。生徒たちの授業時間と学生たちが割ける時間とを一致させることが難しかったが、それぞれに何とか都合をつけて、6月中旬から下旬にかけて生徒と学生が数回面会し、下見見学の段階で訪問したい組織・施設を10か所程度に絞り込んでいった。それをまとめたのが表2の「下見訪問リスト」である。これをみるとわかるように、いくつかの施設は複数のチームによって訪問先に選ばれている。できるだけ重複を避けたいところだったが、学生や生徒の自主性を重んじるというタテマエ上、調整はしなかった。また学生と生徒の時間の都合によって、五月雨式に訪問が行なわれたので、バラバラと何度も中学生の目にさらされた施設や関係者があったに違いない。学生が中学生を引き連れて学内を回るこの下見見学は単に外側から施設等を見学するだけで、関係者への面談や質問は行なわなかった。

初めて中学生と対面した学生たちは自らも緊張していたし、また生徒の緊張が伝わってきて一層ナーバスなっていたらしい。翌年に教育実習を控えている3年生にとって、次のような経験と気づきは非常に重要であるといっていよう。

最近の中学生はキレやすいとか、対人関係を築くのが下手などのイメージがあったので、最初はどうなることかと思っていたが、実際に話してみるとすぐに打ち解けることができ、よかったと思う。そしてやはり最初は中学生が緊張しているのでこちら側から積極的に話しかけることが大切だと感じた。

下見見学のあと、生徒と学生が相談して訪問先をさらに5か所に絞り込んでいった。インタ

ビューに備えて質問表を作ったチームもあった。そして中学校側の「地域学習の時間」として特設された7月4日から8日にかけて、各チームが選別した5か所を訪問し、インタビューや資料収集を実施。学生たちは予め訪問時間を連絡し、インタビューの承諾を得るように努めた。表3は、各チームのインタビュー先と訪問日をまとめたものである。この文書は関係部署にも配布した。

インタビューで得た情報や集めた資料をもとに、学生の支援を受けながら生徒たちはキャンパスツアーのための準備に取り掛かっていった。下調べが足りないからと再度の訪問をして、ツアーガイドが滞りなく実行できるように念をいれるチームもあった。この間学生たちは数回中学校に行って打ち合わせを行い、ツアーガイドのための資料の作成や説明文作成の準備を手伝ったのである。この段階で学生たちに期待したのは、生徒を指導しすぎないこと、手伝いすぎないことであった。できるだけ生徒たちの自主性を尊重し、自発的活動をまつことを望んだ。私（河上）が直接観察することはできなかったが、学生たちは自分を抑えて支援の姿勢を守ってくれたのではないかと思う。

第1段階でも、学生の忍耐強さと頑張りには敬服していたが、この第2段階に入ると、生徒との時間調整が非常に困難であり、また連絡の不十分さもあって、学生たちは非常に苦勞したようであった。しかし学生たちの顔は、第1段階より生き生きとして見えた。それは生徒たちと接することから生まれていたようだ。真剣に学ぼうとする生徒たちを目の当たりにして、自分たちも生徒たちの信頼に応え、できる限りの支援したいという気持ちになり、それが顔に現われていたのであろう。「生徒たちのために」という思いが彼らを突き動かしていたのだと思う。また中学生によるキャンパスツアーという目標が具体的に見えてきたことも、学生たちを元気にしたかもしれない。環境問題のゼミナールを訪問したあるチームの学生は、次のように

表 2 KMP キャンパスツアー下見訪問リスト

2005.6.24作成

施設名	チーム名	文化	科学	施設	スポーツ	総合
	1号館			○		
展望ラウンジ Step Over	1号館			○		○
地下演習室	2号館	○				
バーチャルリアリティセンター	3号館 (3-301)		○			
日本常民文化研究所	9号館	○				
常民参考室	9号館	○				
学食 (カルフルシフォン)	10号館			○	○	○
10-41・42 講堂	10号館					○
工学部建築学科 構造材料実験室	12号館 (12-11)		○			
図書館	15号館			○		○
留学課	16号館			○		
セレストホール	16号館	○		○		○
教職課程指導室	17号館	○		○		
ボランティア支援室	17号館	○				○
プール	17号館				○	
日本語教員養成課程指導室	17号館	○				
就職課	18号館			○		
生協	19号館			○		
学食 (LUX)	19号館			○		
保健室	19号館				○	
語学視聴覚室	20号館	○				
LL 教室	20号館	○				
マクドナルド	21号館			○		
リハーサル室	22号館	○				
トレーニングジム (健康科学スポーツセンター)	22号館				○	
コンピューター演習室	23号館 (23-103・109)		○			○
工学部応用化学科 山村研究室	23号館 (23-801・808)		○			
法科大学院	24号館			○		
法廷教室	24号館	○				○
航空工学研究部	体育館のわき		○			
内燃機関研究部	体育館のわき		○			
自動車工学研究部 http://jggj.net/kanclub	体育館のわき		○			
メカニカルデザイン部 http://blue.ribbon.to/~zyouheki/			○			
体育館					○	○
グラウンド&テニスコート					○	○
剣道場					○	
合気道場					○	

表3 KMP キャンパスツアー訪問リスト7月4日～8日

2005.7.18作成

施設名	チーム名	文化	科学	施設	スポーツ	総合	備考
バーチャルリアリティセンター	3号館 (3-301)		◎7/7			◎7/7	
日本常民文化研究所	9号館	◎7/4					
学食 (カルフルシフォン)	10号館			◎7/6		◎7/6	
10-41・42講堂	10号館					◎7/8	
工学部建築学科 構造材料実験室	12号館 (12-11)		◎7/15				
図書館	15号館			◎スミ		◎7/7	
セレストホール	16号館			◎7/6			
ボランティア支援室	17号館	◎7/7					
プール	17号館				◎7/6		
生協	19号館			◎7/6			
保健室	19号館				◎7/6		
語学視聴覚室	20号館	◎7/6					
トレーニングジム (健康科学スポーツセンター)	22号館				◎7/6	◎7/6	
コンピューター演習室	23号館 (23-103・109)		◎7/6				
工学部応用化学科 山村研究室	23号館 (23-801・808)		◎7/6				
法廷教室	24号館	◎7/6		◎7/6		◎7/6	
体育館					◎7/6		
グラウンド&テニスコート					◎7/6		
メカニカル・デザイン部			◎7/6				
経済学部学部長室		◎7/6					
松本ゼミナール		◎7/5					

書いている。

(生徒たちは) 4月から始まったゴミの分別拡大についての意見や家庭での取り組みについて大学生から質問されると、真剣に答えていました。みんな、とてもしっかりした意見を言っていたので、私は、感心しました。もしかしたらそこら辺の大学生よりもよく考えているのではないかと思ったくらいです。・・・中学生は色々と考えているので、それを言う機会をたくさん中学生に与えてあげることは大切だと思いました。

しかし時には、生徒たちがやる気をなくすこともあったようだ。別の学生は次のように報告している。

時折彼らがダラけたり、やる気がなくなったりした。その時には何とかやる気を出させようと、資料を充実したものにしたたり、遊び心を加えたりした。また仲を親密にし、信頼関係を創るために、学校のこと、部活のこと、普段のこと、先生のこと・・・など、たくさんのお話をした。

すべての学生に共通した思いは、ある学生の次の言葉に集約されているだろう。

生徒のみなさんの活動を陰から支え、少しでも役に立てたらと思います、(プロジェクトに) 取り組んできました。日を重ねるにつれ、生徒とも親しく接することができ、とても楽しく活動することができました。

ただこの時期になると、時間調整の関係で活動に支障をきたす学生も出てきた。とりわけ時間割がタイトな学部の学生は、生徒との面会に時間を割くことが難しかったようである。幸いなことに各チームにそれぞれ1人はなんとか時間を都合できるメンバーがいたおかげで最後まで

で持ちこたえられたが、残された学生の負担は大きかったと思う。今思っても薄氷を踏むようなプロジェクトであった。

この第2段階の反省点としては、学生と生徒の共同作業についての経過報告を聞くことができなかったことである。第1段階と同様、学生たちが一堂に会する時間がもてないこともあり、生徒との関わりの実態、そこでの試行錯誤や成功と失敗の体験を、鈴木や河上を含むメンバーで共有し、分かち合い、語り合うことができているならば、学生の学びはもっと深まったに違いない。ある学生は次のような不満を述べている。

生徒たちをどのように指導・支援していけばよいのかわからなくなる時があった。私達が計画してきたものをやらせたり、私達が作ってきた資料を見てもらったりするのは一方的過ぎるので、何か違う方法があるか模索したが、なかなか良い答が浮かばない。そういつた時に、中学校の教師や大学側の教授と学生の意見交換や相談ができるような場を設けて欲しかった。

この学生の言う通りである。学生と中学校および大学の教員が折に触れて会合を持ち、生徒の反応や行動の解釈について、学生と生徒の支援的関係のあり方について、今後の方向性や課題について、話し合うことができているならば、プロジェクト自体の実もあがったであろうし、何より私たちが狙っていた学生の学びと成長はもっと促進されたに違いない。この接点をしっかりと計画に組み込むことができなかったことは返すがえすも残念であり、大いなる反省点である。

(2) 生徒の活動

この間、生徒の側は、大学生と接することができて、とても楽しく感じていたのである。生徒たちが書いた感想はおおむね次のようなもの

である。

〇〇さんがとてもいい人でよかった。楽しかった。

神大の人たちと一緒に話し合いができて、ずいぶん計画が進みました。これから先がどんどん楽しみになってきました。

この辺が中学生側からの見方と学生の感じていたこととのギャップであったらしい。学生の感じていた漠然とした不安や戸惑いの原因のひとつは、生徒の能力や、生徒の年齢からくるムラッ気や不安定さについて十分な認識がないことである。もうひとつは、学生が中学時代に、問題解決的な学習や活動的な学習を体験していないということにあるだろう。問題解決的な学習では、もたもたしていたりぐずぐずしていたりしながら、学習問題の核心となるあたりにうろろと時間を費やしていくことがよく見られる。そして、そのことが大切である場合が多い。

ともかく、中学側の指導者としては何の不安もなく活動を進めていた。ただ時には、「中学生なんてそんなもんだよ、上出来、上出来」とか「大丈夫、あの子たちは最後にはしっかりやるから」などという、学生に対する声かけが必要だったかもしれない。そのあたりは、大学生を指導したことのない中学校教員側の大きな課題と言える。

この時期の活動は、私（鈴木）と学生のメールでのやりとりにより進めていた。たしかに日程の調整は難しく、こちらの総合的な学習の時間に、学生が空いているということはほとんどなく、放課後や休み時間を利用して打合せを実施した。これは、両校が徒歩15分の距離にあったからこそ可能であった。

中学校の教室に、入れ替わり立ち替わり学生が出入りしている状態は、たいへん珍しい光景でもあるし、楽しいものであった。中学教師は

多忙であるので、しばらくは学生のリーダーと中学生のリーダーに任せきりでいた。

調整を繰り返しながら行なわれた下見ツアーを経て、グループごとに大学訪問を実施していく中で、中学生のモチベーションは飛躍的に高まった。

神大はすごい。グラウンドや体育館が広がった。この施設のすばらしさを、ツアー客に伝えたい。

僕は、工学部系の施設に行きました。すごい機械があり驚きました。僕も絶対に大学に行きたいという気持ちが強くなりました。あの設備についてわかりやすく説明できるようにがんばりたいと思います。

7月のグループごとの訪問を終えてかえってきた生徒に声をかけると、「ぼっちですよ」、「もう大丈夫」などという声が返ってきていたことを思い出す。

今からふり返ると、この6月の動きは大変な状況であった（やっているときはそれほど感じなかったが）。少しでもその雰囲気を知っていただくために、ある日の学生と鈴木とのメールのやりとりを再現してみよう。朝からPCに張り付いてメールのやりとり、携帯電話も駆使しての学生との連絡の毎日であった。

<6月〇日> S=学生 T=鈴木
S→T

キャンパスツアー担当の〇〇です。連絡が遅くなりましたが、明日キャンパスツアーの下見をする予定です。生徒達はそのつもりでいると思うのですが、連絡不足ですみません。控え室などの準備が完全でないのですが、ツアーの段取りはできているので大丈夫かと思えます。詳細は明日、電話で連絡させていただきます。

<このメールは退勤後の送信で、私は翌朝

見ることになった>

T→S

何時にどういう約束ですか?一応授業の一環ですから、いろいろ難しい問題もあるし、すぐお返事ください。校長には許可を取りましたが、生徒を校外に連れ出すのは校長の許可が必要ですし、保護者の理解を得る必要があります。注意してください。

S→T

15:00に図書館の方に案内してもらう予定なので、それに間に合うとうれしいです。

T→S

14:50に1号館の前でいかがですか?生徒も今日打合せがあるとは認識していませんでした。子どもは何度も確認しないと難しいですね。かなりしっかりした生徒なのですが。これもみなさんの勉強です。でも、私と松本中の校長だからOKでましたけど、普通だったらプロジェクト自体が危うくなっちゃうよ!

S→T

今日はご迷惑をおかけしてすみませんでした。今、下見を終えて生徒達を学校に帰しました。すごく楽しくまわることができました。次回もまた、決まり次第なるべく早く報告しますのでよろしく願います。今日は、本当にありがとうございました。

T→S

子ども達は大変疲れていたようです。あれで、結構緊張しているものです。そういうことを配慮していくことも校外で学習させるときのポイントなのです。ともかく今日はありがとう。

一日でこの有様である。しかもこれはある一

つの班のやりとりだけである。全部で5班あるので、6~7月にかけて、ほぼ毎日こんなやりとりが続いたのであった。もちろんこの間にも通常の授業や業務がある。この日は、休み時間に学校を駆け回り、生徒と確認をとり(生徒はいろいろなクラスに散らばっているので)、校長の許可をとり、学年の教師や担任、参加生徒が所属する部活動の顧問に謝りながら了解を取り、保護者への連絡は生徒から手紙をもたせることにし、と一気に校内処理を済ませて14:30には授業終了とともに生徒を送り出した。

しかし生徒がすごく楽しみにしている活動であり、他の中学校では経験できない学びの場であると思っていたから、たいした苦痛にも感じず、むしろ生き生きとサポートできたと記憶している。

4. 第3段階: キャンパスツアーの実施

(1) キャンパスツアーの様子と学生の感想

こうしてキャンパスツアーの下準備を終え、学生も生徒も夏休みに入ったが、9月下旬から10月上旬にかけて各チームの学生は、中学校を数回訪問して資料作りや説明内容の確認を行ったり、直前にリハーサルを行ったりして念入りな準備をした。パンフレットも素晴らしいものが用意された。

そして10月8日、キャンパスツアー当日がやってきた。雨もよいの薄寒い日であったが、中学生たちは用意した旗を掲げて、元気よくキャンパスツアーに出発した。ツアー参加の保護者や地域住民が少なかったのが残念だった。少なくとも各チームに10人程度の参加者が欲しかったのだが、少ないチームではたった3人の参加者に5人の生徒が説明に当たる結果になってしまった。

とはいえキャンパスのあちこちで、中学生たちが十分に準備をしたことがわかる自信にみちた態度で、大人を相手に堂々と説明している様子は感動的であった。同一時間帯にあちこちでキャンパスツアーが行なわれているので、すべ

てを観察することはできなかったが、携帯電話と分刻みのスケジュール表を片手に進行状況を確認しつつ、いくつか同行してみた。工学部の化学実験室の前では用意した模造紙を広げ模型を使って、その研究室で行なっている研究について説明をしてみせていた。図書館やジムでは、まるで自分の部屋のように設備や機能を案内していた。法廷教室では、生徒たちが裁判官、検事、弁護士、被告に扮して模擬裁判を実演していた。

そしてその生徒たちの姿をみつめる学生たちのまなざしの優しさと晴れやかさ。学生たちもこの日を迎えてそれまでの苦勞が吹き飛んだことだろうが、私（河上）も生徒と学生双方の様子を見て、このプロジェクトが一応の成功を取めたことを確信した。

何よりも感動的だったのは、学生が生徒の成長を目の当たりにしたことを心から喜んでいることであった。

最初…会ったときは、少し頼りない部分があり、正直、このメンバーで本番までに何とかできるのかな、と思っていたが、中学生の成長ぶりには本当に驚かされる。最初は人前で話す以前に、私達大学生と話をするのも緊張がみられたのだが、今日の本番では予定になかったアドリブで笑いをさそったり、私の想像以上の発表ができていた。

自分のグループには比較的元気の良い子たちが揃っていて、今日のキャンパスツアーできっちりやってくれるか、というわずかな不安がありました。しかし、彼らはリハーサルよりもはるかに素晴らしく、たくましい態度で、本番をクリアしてくれました。自分が思っている以上に、生徒一人一人は、各自の役割を理解し、周到的な準備を進めてくれていた結果であると思います。生徒の成長を見れたことは、とても貴重な経験だと思えます。

この数ヶ月、5名の生徒達と触れ合って、生徒達の成長を目にすることができ、大変良い機会を過ごせたな、と思います。

そうなのだ。数ヶ月という期間の中で、キャンパスツアーという一定の目標に向けて活動を組織していく過程を共有したからこそ、生徒たちの成長に気づくことができたのである。これは2-3週間の教育実習では体験することのできない感動であろう。そして生徒の成長を実感できることこそが、教育の原点であり教育職の醍醐味なのだ。

(2) 生徒たちの活動と感想

キャンパスツアーの実施に先立つ9月に、総合的な学習の時間・「地域学習」の学年発表会があり、キャンパスツアーのグループにも取組みの途中経過を報告してもらった。生徒は、写真等を使って発表したり、クイズを作ったりした。科学チームは習ってきた実験をして見せた。どのチームも神奈川大学の魅力を実に楽しげに語っていた。

いよいよツアー直前になると、何度も打合せをしたり、大学に行ってリハーサルをしたりという活動を行っていた。この間の連絡もまた学生とのメールである。この時期、2学期制の松本中学校では学期末にあたり、期末テスト、成績処理等が入り、しかも体育祭というとても大きな行事があつて、中学校側は混乱を極めていた。そのため学生との約束を忘れてしまったこともあった。それでも、なんとかこのプロジェクトを成功させようという相互の「思い」があつて、乗り越えることができた。この直前期での学生たちの対応には心から感謝している。

生徒が作成した保護者むけ案内のメッセージを紹介しておこう。

【文化・芸術コース】

私たちのコースは、神奈川大学の文化や芸術に関連するところをご案内します。神大にしかない常民文化研究所や語学教室、ボラン

ティア支援室などを見学します。楽しいツアーにしますので、みなさん見に来てください。

【科学・理科コース】

理系の設備が少ない横浜キャンパスにも高度な科学技術を集めた設備があることをご存じでしょうか。僕たちKM（注：神奈川大学・松本中学校の略）プロジェクト科学チームは、神大の山村研究室での電子レベルの実験や、迫力あるCG映像「バーチャル地球史博物館」などの施設を紹介します。

【スポーツ・健康コース】

私たちスポーツ・健康チームは神奈川大学のスポーツジム（一般の方にも開放しています）や保健室（といってもすごく大きいですが）などの、スポーツや健康に関する施設を案内します。一生懸命ガイドしますのでぜひおいでください。

【施設コース】

僕たちは、神奈川大学の特色ある施設を案内します。案内する際には、工夫した発表を予定しているので、ぜひ参加してください。お待ちしております。

【総合コース】

僕たちは、神奈川大学にあるさまざまな施設について学びました。めったに見ることのできない施設も見学させてもらい、とても勉強になりました。学習したことを生かして、



▲キャンパスツアーを終えて

精一杯ガイドしたいと思います。

そして、ツアーガイドマップやパンフレットも完成し、いよいよキャンパスツアー当日を迎えたのである。

前述したように、当日は中学生がとてがんばり、説明の内容も方法も充実したものでしたので、ツアーに参加した人たちは非常に感動したようである。

キャンパスツアーに参加した保護者の感想を掲げてみる。

【文化・芸術コース】

身近にありながら、初めて神奈川大学におじゃましました。研究資料の数々をみせていただきとても興味深く見学させていただきました。生徒の説明する様子からは、これまでの学習で一生懸命努力してきたことが伝わりましたし、生徒を見守りサポートして下さる学生さんと研究室の先生の温かいお気持ちですが、保護者として、とてもありがたく思いました。

【科学・理科コース】

近くでありながら入ることがなかった大きな施設をみせていただき、おもしろかったです。松中生、神大生との交流の中で、本格的な実験や施設を見ることで、将来の展望がもてたらしいですね。

【スポーツ・健康コース】

普段、あまり見ることのない大学内を見学させていただいて、とても楽しかったです。松中生の説明や対応も素晴らしく、また、足りない部分を大学生がカバーしてくれて良かったです。室内プールやジムは一般に開放しているということなので、一度利用してみたいと思いました。

【施設コース】

原稿を見ることなく、自分のことばでわかりやすい説明でした。いきいきとした様子から、神大に憧れを抱いている様子。「将来、神大にきたい？」と聞くと、「はい、でもそ

の前に高校入試がありますから・・・」とのこと。将来に夢と希望をもっている子ども達に、力強さを感じました。前向きな子ども達の姿勢に、拍手！

【総合コース】

総合ということで、広く浅く・・・のイメージでしたが、そんなことはなく、各々の場所について、とてもわかりやすく要点を押さえた説明で、よく調べてあるなあと感じました。模擬裁判も、よく考えられていて楽しかったです。神大に通って学習しているときも、きっととても楽しかったのだろうと感じられてよかったです。

こうして、参加者はやや少なかったものの、好評のうちにキャンパスツアーは終了した。さてツアー終了直後の生徒の感想をいくつか紹介しよう。

中学生である僕たちは、まだ、大学というものの全体がよく見えていなかった。しかし、学習を進めていくうちに、その全貌がわかってきて、そのスケールの大きさに率直に感動した。7月に入ると神大の学生の方と打ち合わせをするようになった。自分たちよりも年上の学生の方と話すと思えば緊張していたが、担当の方はとても親切で、僕たちの知らない世界を教えてくれたので、その後の学習の進みがよくなった。実際に神大へ行って様々な体験（セミクや化学実験）をした。中学校ではできない貴重な体験をさせてもらってうれしかった。

はじめは少しかたくて、自分自身大丈夫かなと思いましたが、僕が案内した常民文化研究所をきちんと理解してもらえたと思うのでよかったです。練習ではつまってしまったり、学生さんに背を押される場面もありましたが、ほぼ予定通り案内することができてホッとしました。ここまでくるのに多大な時間を

使いました。6月頃から学生さんと共に神奈川大学内をまわり、まず自分で理解しようと努めました。そして、ツアー本番のために何度も打ち合わせをして当日成功させることができたので、うれしく感じました。

これらの感想を読むと、6月から少しずつモチベーションが高まり、神大への理解や学生との交流も深まっていった様子が感じられる。

その後も中学生の学習は続き、11月に全校発表会で学習成果を報告した。科学チームを中心にパソコンを使って体育館でプレゼンテーションを行なった。

最後に、彼らが高等学校受験に際し作成した「自己PR書」³⁾に書いたものを紹介したいと思う。

神奈川大学との連携事業に参加したことは、自分の進路を考える点においても、大学の魅力を知ることができた点でも、本当に貴重な体験でした。

松本中学校では、総合的な学習の時間がとても盛んです。中でも、神奈川大学との連携事業がとても印象に残っています。これは、大学生と一緒にキャンパスツアーを企画したものです。この経験により、より大学に進学したいと思うようになりました。

ここには、二人分の短い文のみを掲載したが、キャンパスツアーの企画に参加した全員が、高校進学にむけての自己PR書に、このプロジェクトの体験を書いている。そして、全ての生徒が、「大学に進学したいと思うようになった」という趣旨を述べている。自己PR書では、ほんの数行のスペースに、自分たちの中学校3年間の体験を書くのだが、その中に全員がこのキャンパスツアーを取り上げたということは、少なくとも生徒にとって非常に強烈な印象を残した学習であったということが出来る。またそ

れが彼らの進路選択に大きな影響を与えたという事実は、中学生という時期の学習の成果として見逃すことができない。

おわりに

こうして 1 年後に学生と生徒の活動を振り返ってみると、学生に対する感謝と敬意を新たにせざるを得ない。単位にもならず、成績にも関係なく、何の報酬も得られないとわかっていながら、忙しい日程をやりくりして学内諸機関との交渉に走り回り、生徒との手さぐりの共同活動を進め、そして生徒を励ましつづけて素晴らしい成果を生み出してくれた。

そして私たちの意図した通り、交渉相手を納得させ、同意や協力を引き出すことの難しさを身をもって経験し、そのことの意味も後になるほど理解してくれるようになった。教職課程の学生にとって何より収穫だったのは、生徒の自主性を尊重しつつ側面から支援するという困難な体験をもつことができたこと、そしてその報奨として生徒の成長と自発性をその目で確認することができたことであろう。

協力してくれた 10 人の学生（うち 9 人が教職課程履修者）のうち 2 人が教員採用試験を現役合格し、4 人が教職浪人の道を選んでいる。彼らにとって、このキャンパスツアープロジェクトを最後まで遂行したことが、そしてその過程で経験したさまざまな努力や苦労が、今後の職業生活の上に少しでも役立つことを祈っている。

最後に、この企画に振り回されつつ協力してくださった学内のさまざまな組織・施設・機関の関係者に改めて深い感謝を捧げたい。⁴⁾

- 1) 神奈川大学の学生の活動は河上が、松本中学校の生徒の活動については鈴木が執筆した。
- 2) 以後引用する学生の言葉は、キャンパスツアーの下準備ができた 7 月と、キャンパスツアーが実施された 10 月 8 日に学生に書いてもらった感想文である。
- 3) 神奈川県公立高等学校入学選抜に際し、前期選抜で行われる面接検査に参考とする資料。生徒は中学校での取り組みや活動の成果などの自己アピールを書いて提出する。
- 4) この企画が好評だったので、翌年も同様のキャンパスツアーが実施され、保護者・地域住民の参加者も 40 名に増加した。